

## 茂木敏充衆議院議員との対談

## 1. 教育のあるべき姿

開倫塾

塾長 林 明夫

林 : おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただきましてありがとうございます。

今回は新学期になってはじめての放送ですので、特別番組として、衆議院議員の茂木敏充先生をお招きして、これからの人材教育について日本の現状と海外の現状を比較しながらお話をさせていただくことになりました。よろしくお願い致します。

茂木先生、今日はよろしくお願い致します。

茂木 : はい、おはようございます。よろしくお願い致します。

林 : 先生、日本の教育の現状を海外と比較してどのようにお考えですか。

茂木 : 私は国会議員になって12年たちます。昨年は大臣として、今ライブドアのホリエモンなどで話題になっているIT・情報通信にかかわり、また科学技術担当大臣でもあったので、海外へ行く機会が多かったのですが、アジアの国々や今非常に教育が進んでいるといわれているフィンランドなどを訪問する中でやはり日本の教育も改善した方がいいなと思う点が非常に多いんですね。

林 : 先生はその他に外務副大臣もお務めになっていたということで、広い見地から教育についてお話を伺いしたいと思います。まず最初に、先生は、教育とは何であるとお考えでしょうか。

茂木 : いきなり、林さんらしい非常に哲学的な質問というか、難しい問題提起ですね。私は、日本の教育というのは、先生が生徒を教えるという一方通行になっているような気がするんですね。それに対して、英語では教育をエデュケーション(Education)と言いますが、このエデュケーションという言葉はどこからきているかといいますと、ラテン語にエデュコ(Educo)という言葉があり、そこからきているんです。

ラテン語のエデュコという言葉の意味は何かといいますと、もともとは「引き出す」という意味なんです。個々の生徒・子どもたちがそれぞれ違った個性や潜在能力を持っている。これを先生が引き出すのだという、つまり上から下へというよりは双方向からという点で、私は教育に対する基本的な考え方が日本と欧米とでは少し違うんじゃないかと思っています。

林 : 教育の歴史から見て、今の教育をどのようにお考えでしょうか。

茂木： またシリーズの中で、歴史教育の話は議論させていただきたいと思うのですが、人類の歴史と教育という観点から、本当に乱暴な言い方をすると、私は、人類というのは勉強に向いていないんじゃないかと思っているんですよ。林さんの前でこんなことを言うのはちょっと問題かもしれませんが…。

具体的に説明しますね。人類の歴史は、原人が地球上に現れてから 180 万年、ホモサピエンスが出現してから 15 万年とされているんです。つまり、何十万年、何百万年の世界なんです。ところが、例えば文明ということになりますと、4 大河文明、エジプトとかメソポタミア、インド、黄河文明でもたかだか 4000 年なんですね。世界に教育機関が出来てからの歴史となりますと、1000 年とか 2000 年なんです。ですから、人類というのはやはり机に向かって勉強することより野山をかけずり回って獲物をとったりすることのほうが得意な動物で、あまり勉強には向いていない。少なくとも人類史的にはそうとも言える訳です。

そうすると、苦手科目の克服といっても、動いていることが好きで勉強は嫌い、その嫌いな勉強の中でも一番苦手な科目から始めたらいつまでたっても勉強好きにはならないんじゃないか。それよりはむしろ苦手な勉強の中でも一番良い科目を伸ばす。こちらの方が人類の勉強には向いているんじゃないかと私は思いますね。苦手科目をやるとやはりうまくいかない、すると、勉強をやってもつまらないということになりますから、それよりはむしろ得意科目を伸ばす。例えば、得意な英語で良い点数が取れるようになった。それだったら国語もやってみよう、国語もうまくいくようになったら今度は違う科目もやってみよう。こういうふうに成功体験を積み重ねることが大切だと思います。

もう一つ、勉強も役に立たないとしょうがないですよ。役に立たないことをいくらやっても忘れてしまいますし、また、自分でやってよかったなという気持ちにもなれませんから。成功体験を重ねることと役に立つ・意味のあることをやるということが重要じゃないかと思っています。ただ、こんなふうに言うと、茂木さん、本当にそれで受験は大丈夫なんですか、社会人になってから大丈夫なんですかなどと聞かれるんですけども、実はラジオの前でとても恥ずかしいのですが、私は理科がものすごく苦手だったんですよ。

林： 茂木大臣は、それでも東京大学をご卒業になられた・・・。

茂木： 当時の東大には、理科は二次試験の入試科目にありませんでした(笑)。高校 1 年の時の物理で 15 点とったんですよ。100 点満点で 15 点では駄目だと理系をあきらめて、文系の方に進んだんですが、試験科目にある数学もあまり得意じゃなかった。一応、サイン・コサインとか微分・積分とかは覚えたんですが、大学入試以来 1 度も使っていないですよ。

しかし、国会議員になって 12 年、大臣もやりましたが、理科や数学が苦手で困ったということはないですよ。いろいろな企業の経営者、そうそうたる企業の社長さんにも会いますが、数学ができない、微分ができないために恥をかいたことは 1 度もありません。

それから、去年私は科学技術担当大臣をやっていたのですが、政府に総合科学技術会議というのがあり、そのメンバーには、京都大学の総長であったり、東北大学の名誉教授であったり、日本学術会議の会長であったり、科学の各分野の一番の人というか、鉄腕アトムの世界の

お茶の水博士みたいな人たちがそろっているわけですよ。それを取りまとめる議長役を私がやったわけです。物理が 15 点の私でもちゃんとその取りまとめができるわけですから、苦手科目にそんなにきゅうきゅうする必要はないんじゃないかと思っています。

林： 国際化の時代、IT 化社会などよく言われます。時代の変化に対応するために、教育はどのようにあるべきだとお考えでしょうか。

茂木： IT の話はできたら来週あたりにしたいと思っています。一つはやはり国際化と英語の問題です。私も国際会議などに出ることが多いわけですが、最近、どこの国の代表もみんな英語で発言するんですよ。全ての会議が英語で進行し、同時通訳は付きますが、同時通訳を使っている人というのはほとんどいないですね。ヨーロッパの人もこの 10 年ぐらいで非常にうまくなり、それからアジア、特に中国の人が非常に英語がうまくなってきています。

それにくらべて、日本人は下手なんですね。英語が苦手なんですよ。考えてみますと、我々は中学校で 3 年間英語をやり、高校でも 3 年間、さらに大学に行くと教養課程で 2 年間やりますから、合わせて 8 年間もやっているのに話せない。これは少し考えないといけないなと思っています。

林： 今日には衆議院議員の茂木敏充先生をお招きして、外務副大臣、科学技術担当大臣を務められたご経験から、教育とは何か、時代の変化に対応した教育とは何かについてお話をお伺い致しました。まだまだお聞きしたいことが沢山ありますので、また来週もよろしくお願ひ致します。